

大田区立尾崎士郎記念館版 記念館ノート

第2号

発行：2018年3月6日

編集：大田区立龍子記念館



とっておきの一枚!

大森源蔵ヶ原自宅にて一服する士郎と妻・清子、長女・一枝
昭和12年(1937)頃撮影 大田区立郷土博物館提供

このころの士郎は、長女の誕生や代表作『人生劇場』がベストセラーになるなど、充実した日々を過ごしていた。

館のトピック

◆中川一政と尾崎士郎

中川一政(一八九三～一九九一 洋画家)はバラの花に関連した作品を多く残したことで知られています。洋画以外にも、版画や陶芸、文学と様々な分野で活躍し、功績が認められて文化勲章を受章しました。中川の記念美術館は神奈川県真鶴に二カ所あります。文学の世界では、中川は短歌や随筆を発表したほか、挿絵画家として実績を残しました。中川が最も多く挿絵を手掛けたのが、『人生劇場』シリーズです。尾崎作品の単行本装丁では、『人生劇場』シリーズほか三十作以上担当しました。『人生劇場』がベストセラーになったのも、中川の尽力がありました。編集者とともに挿絵担当の中川が出版社に掛け合い、装丁を担当することで昭和十年(一九三五)十月、『人生劇場(青春編)』が竹村書房から出版されたのです。中川は尾崎宛の手紙等に挿絵の下書きを使うこともあり、「とっておきの一枚」にも写っている挿絵軸(複製を当館が所蔵)には、「此図人生劇場挿絵八二函也。為作者尾崎君再寄昭和八年八月一政」との一文が記され、「人生劇場」八十二番目の挿絵をもとに作成して尾崎へ送ったものと考えられます。四十年近く作者と挿絵画家として携わった尾崎と中川ですが、実際顔を合わせたのは数回ほどでした。仕事を中心とした尾崎との長い交流を中川は「プラトニックな親交」と語っています。直接の親交が少なくても、強い信頼関係を築いた二人ならではの言葉ではないでしょうか。



中川一政「人生劇場」挿絵軸(複製)
原画制作：昭和8年(1933)8月

わった尾崎と中川で

平成30年度の予定

○館内見学

毎月第1土曜日 14:00～15:00 ※申込み不要 当記念館集合
普段は入館できない館内を見学できます。時間内に記念館までご来館ください。

○講演会「馬込文士の足跡をたずねて～徳富蘇峰が語る勝海舟と西郷隆盛～」(仮) 5月20日(日)

講演会に合わせて尾崎士郎記念館の館内見学を実施します。

○散策会「馬込文士の足跡をたずねて」文士村散策会

平成31年3月21日(木・祝)
当記念館や馬込文士村の関連施設をはじめ、馬込文士の旧宅跡やゆかりの場所まで散策します。

※講演会と散策会については、事前申し込みが必要となります。申込方法につきましては、HP、財団広報誌 Art Menuに掲載予定です。

※日程等は変更される場合があります。予めご了承ください。

館の基本情報

《所在地》

大田区立尾崎士郎記念館
〒143-0023 東京都大田区山王1-36-26
※建物内には、お入りいただけません
TEL 03-3772-0680 (龍子記念館内)
URL <http://www.ota-bunka.or.jp/ozaki>

《アクセス》

- ①JR大森駅西口(山王方面)より徒歩10分
- ②JR大森駅より東急バス「上池上循環 内回り」、「新代田駅前」行乗車「山王二丁目」下車、徒歩3分

《入館案内》

- 開館時間 午前9時～午後4時30分まで
- ※入館は午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 年末年始・臨時休館
- 駐車場 バリアフリー用に普通車1台分

尾崎士郎の馬込・山王・源蔵ヶ原時代

大田区立尾崎士郎記念館担当学芸員 黒崎 力弥

はじめに

尾崎士郎（一八九八～一九六四 小説家）が、はじめて馬込に居を構えたのは大正十四年（一九二二）である。以後、一時転居として品川や静岡県伊東に暮らした以外は、馬込文士村（馬込を中心とし、山王、新井宿など隣接地域を含めた一帯）で転居を四回繰り返している。中でも、初めて暮らした馬込、次に暮らした源蔵ヶ原は、尾崎が新人小説家から流行作家になり、以後小説家として安定した地位を築いた場所であった。本稿は、尾崎が馬込と源蔵ヶ原でどのような日々を送り、小説家として転換期を迎えたのかを論じる。

1、馬込時代（一九二二～一九二九）

大正九年（一九二二）、尾崎士郎はジャーナリストとして生活を送りながら、小説家として商業誌デビューを目指した「獄中より」が時事新報社主催懸賞小説二等賞として選ばれた。この時、特賞に選ばれたのが、北海道で主婦として暮らしていた藤村（宇野）千代である。翌年、尾崎は室伏高信（一八九二～一九七〇 小説家）を紹介し、『中央公論』掲載作品の打ち合わせで上京した宇野と出会った。そのまま二人は意気投合し、宇野は北海道に帰ることなく、尾崎の住まいで暮らすことになった。大正十二年（一九二三）五月、尾崎と宇野は結婚し、室伏や上泉秀信（一八九七～一九五一 編集者）の勧めから、馬込村中井（現・南馬込）に居を定めた。そのころの馬込は、近郊の開発が進む中、起伏に富む土地柄から耕地整理が遅れており、閑静な農村地帯のままであった。尾崎と宇野は、農家の納屋を百四十円（現在で約八万円）で買い、六畳一間に建て替えた。当時、文学界では最高峰の総合雑誌となっていた『中央公論』に、宇野は「墓を発ぐ」を発表しており、新進小説家としての地位を確立していた。一方で、尾崎は懸賞小説入選後に作品をいくつか発表したものの、大手雑誌に掲載されることはなかった。そのため、このころの尾崎は、文士との交友を中心に日々を過ごしていた。宇野も尾崎が招いた文士

をもてなし、馬込の家では毎日のように酒宴が行われていた。そして、尾崎が文士を招くことで交友が広がり、文士村が形成されたことから、大正十二年（一九二三）が文士村の始まりとなっている。尾崎と宇野の住まいは「愛情の巣」と名付けられ、幸せそうに見えたが、二人の生活は五年目で崩壊してしまっただけでなく、尾崎は自分に尽くす宇野に引け目を感じていた。梶井基次郎（一九〇一～一九三二 小説家）が宇野に恋心を抱いたことをきっかけに、尾崎は宇野の元を離れていった。宇野も新たなパートナーとして東郷青児（一八九七～一九七八 洋画家）と暮らすために世田谷へ転居した。尾崎士郎・宇野千代といった中心人物を失ったことで、馬込文士村の交友は一度は落ち着いたものとなった。

2、山王・源蔵ヶ原時代（一九三二～一九三七）

宇野の面影を振り払うように、尾崎は馬込文士村を離れて、品川・東禅寺裏等を転々として、あらたに妻・清子をむかえた。また、親友・川端康成（一八九九～一九七二 小説家）の勧めなどから、昭和七年（一九三二）、尾崎は定住地として山王・源蔵ヶ原を選んだ。源蔵ヶ原とは、現在の大森山王一丁目界隈を差し、山王草堂を構える徳富蘇峰（一八六三～一九五七 ジャーナリスト）や堀真琴（一八九八～一九八〇 政治学者・政治家）が暮らす住宅地であった。尾崎が文士村に帰ってきたことで、かつての賑やかな交友が復活し、山王・源蔵ヶ原の尾崎家には以前に増して多くの文士が集い、親睦会の一環として「大森相撲協会」（※詳細は『大田区立尾崎士郎記念館ノート』創刊号（二〇一七年三月、大田区立龍子記念館参照）の結成などがあつた。新たに居を構えたとはいえ、馬込時代と変わらず、尾崎は執筆よりも文士との交友を中心に日々を過ごしていた。この様子を危惧した上泉が、尾崎に新聞連載小説の好機を与えたことで、尾崎の人生が大きく変わっていった。この上泉の依頼について、尾崎は次のように述べている。

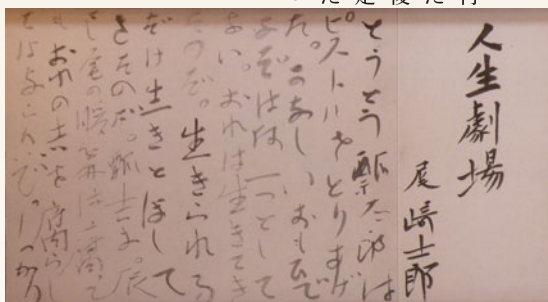
上泉は私にとつては友人であると同時に、もつとも理解のふかい批評家で、私の仕事の方向について以前からしばしば警告をあてていたが、今度の場合は彼の懇願に根づよいものがあり、私はむしろ彼の声をうけて立つ気持になつたのである。昭和八年の三月で、いよいよ都新聞に掲載することになった。これが「人生劇場」（青春編）である。さし絵は

中川一政で、二人の感情は実にびつたり調和していた。（『人生劇場』時代）一九六二年十二月十三日 東京新聞

『人生劇場』は、尾崎の自伝的小説として描かれたもので、特に外伝として任侠物となつた『人生劇場（残侠編）』の人氣が高く、昭和三十七年（一九六二）の『新人生劇場（狂瀾編）』まで続いた尾崎の代表作である。昭和十年（一九三五）、『人生劇場』が上泉と中川の斡旋により竹村書房から発行された。そして、川端の絶賛によりベストセラーとなり、尾崎は一躍流行作家となった。以降、尾崎は『人生劇場』のほか、歴史小説やユーモア小説など様々な分野の作品を発表し、中堅小説家としての地位を築き上げていった。交友関係においても、尾崎は馬込文士たちを中心に「あらくれ会」（自然主義文学の大家・徳田秋聲（一八七二～一九四三 小説家）を慕つた作家集団）を結成して、戦前を代表する文壇の一つとした。家庭面でも、昭和八年（一九三三）四月に長女・一枝を儲けて充実した日々を過ごした。後に尾崎自身、山王・源蔵ヶ原に暮らしていたころが、作家生活の基盤を築くために、もつとも重要な時期であつたと語っている。その後、昭和十三年（一九三八）、尾崎は品川区・大井白石に転居し、昭和十九年（一九四四）には疎開のため静岡県伊東市に転居した。戦後も尾崎は『人生劇場』の人氣が続いていたことなどから、大衆小説家の大家の一人として活躍した。

昭和二十九年（一九五四）、疎開先の伊東から再上京を果たし、居を定めた場所が、山王である。戦後の尾崎が再び山王へ居を定めたのも、転換期を迎えたこの地への思い入れがあつたからではなからうか。

主な参考文献
尾崎士郎『小説四十六年』一九六四年 講談社
『馬込文士村』あの頃、馬込は笑いに満ちていた―二〇一四年 大田区立郷土博物館



自筆『人生劇場』（複製） 制作年不詳 当館所蔵